

物



EBI

竹



MAGURO

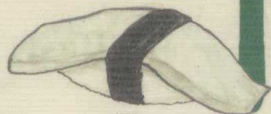
NEW YORK
TAKESUSHI
T A L E

語



AJI

寿



IKA



AKAGAI



ABOKADO

HIROTA MATSUMOTO

松本紘宇

司



TORO



ANAGO



TAMAGO

朝日新聞社

HIROTAKA MATSUMOTO
松本紘宇



ニューヨーク 竹寿司 物語

朝日新聞社

ニューヨーク竹寿司物語

1995年6月5日 第1刷発行

著 者———松本紘宇

発行者———天羽直之

発行所———朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地5-3-2

電話 03-3545-0131 (大代表)

編集・書籍編集部 販売・書籍販売部

振替 00100-7-1730

印刷所———大日本印刷株式会社

©Hiroataka Matsumoto 1995, Printed in Japan

ISBN4-02-256865-8

定価はカバーに表示してあります。

ニ
ュ
ー
ヨ
ー
ク
竹
壽
司
物
語
●
目
次

脱サラ、そして日本脱出

9

- ・初めてのアメリカ旅行
 - ・ケネディの墓で
 - ・自分の未来は自分で開け
 - ・老いた母のため息
 - ・九カ月ぶりのニューヨーク
 - ・仕入れ係は週給八〇ドル
 - ・フルトン市場に魚の買い出し
 - ・豪華、新日鉄の合併披露大パーティー
 - ・コーネル大での貴重な体験
 - ・六〇年代末のアメリカ
- このチャンスを逃すな！

41

- ・イクラの飛び込みセールス
- ・人気商品のウニカズノコ
- ・強制送還の不安
- ・地獄で仏！ 涙のグリーンカード
- ・ニクソン訪中と中国料理ブーム
- ・三年ぶりの里帰り
- ・大逆転のマグロ輸出
- ・サッポロビールに恩返し
- ・ニューヨークの女傑、マダム斎藤の心意気

- ・ そうだ！ すし屋をやってみよう
- ・ 二階のすし屋で大丈夫か？ ・ 名前は「竹寿司」と決めていた
- ・ 一九七五年四月一日、ついにオープン
- ・ 救いの神、『ニューヨーク・マガジン』
- ・ 寝耳に水、リカーライセンス騒動
- ・ 宮様、茶碗酒でゴメンナサイ ・ ヒッピーはすしが大好き
- ・ ニューヨーク破産の危機の中で

竹寿司の快進撃

107

- ・ 今夜は竹寿司で
- ・ 三店目「車ずし」の誕生
- ・ 四店目はカウンター割烹
- ・ 大停電の中での売買契約
- ・ 日本食品のアメリカ上陸
- ・ 自然食の父、石塚左玄
- ・ マクガバン勧告の衝撃

竹寿司の日本逆襲

127

- ・老井護士、頑張る
 - ・五店目は「竹寿司ウエスト」
 - ・ロサンゼルスのスシ事情 ・竹寿司、西海岸に進出
 - ・いよいよ日本逆上陸 ・自由が丘で悪戦苦闘
 - ・日本の外食産業元年 ・欧米化に向かう日本の食
- すしブームと新アメリカ料理

153

- ・一〇〇万ドルの立ち退き料
- ・「ヴァンダービルト竹寿司」の誕生 ・「ワシントン竹寿司」オープン
- ・「カニカマ」の大ヒット
- ・竹寿司カナダ店オープン ・竹寿司、大西洋を渡る
- ・八〇年代のアメリカ ・一九八三年はアメリカ料理元年
- ・アメリカ料理の父、ピアード
- ・名シェフが続々登場 ・アメリカ版ミシュランの評判

アメリカは健康志向時代

183

- ・インスタントラーメンも健康食品？
- ・大手すしチェーンのアメリカ進出
- ・アメリカで飲む日本酒　・ライトビール革命
- ・ファットフリーとローファットの違い
- ・毒を盛られるアメリカ　・マクガバン勧告の効果

竹寿司から見たアメリカの食

207

- ・ヘルパーとウエイトレスに強力助っ人
- ・アメリカ人の好きなエスニック料理
- ・フュージョン料理の流行　・トゥイナーとカウチポテト
- ・一〇〇ドルのステーキを誰が食べる？
- ・レストランの人種差別

試練のすしレストラン

227

- ・冷凍ずしがやって来た

- ・再燃する生魚論争 ・トロが食べられなくなる
- ・ゴム手袋ですしが握れるか
- ・新たな出発

参考図書

あとかき

装画・松本紘宇

装丁・鈴木成一デザイン室

ニ
ュ
ー
ヨ
ー
ク
竹
寿
司
物
語

脱サラ、そして日本脱出

一九六九年七月二十一日正午すぎ、僕はサッポロビール川口工場の社員食堂で、もりそばを食べながらアメリカからのテレビの衛星中継に見入っていた。そこには、月に着陸したアポロ一一号から宇宙飛行士が月面に降り立って、ゆらゆら揺れているのが映っていた。

アメリカ時間では前日の午後四時、日本時間ではこの日の早朝五時、アポロ一一号は月面着陸に成功していた。それから六時間半たったいま、宇宙飛行士が月面に降り立ったのである。

食堂にいる人は皆、声もなく画面を見つめている。やがてアームストロング船長の、「この一步は小さいが、人類にとっては偉大な飛躍だ」

という言葉が月から届いた。この言葉が僕の心を震わせた。

八年前の六一年五月、ケネディ大統領は議会において、こう演説した。

「いまや大きな前進の一步を踏み出す時が来ました。偉大な、新しいアメリカの国家的事業に向かう

時が。すなわち、わが国が宇宙開発において指導的役割を果たす時が来たのです」

「へやっぱりアメリカだ。この偉大なアメリカを、自分の体で実際に味わってみよう。僕も一步を踏み出そう！」

僕はこの日の夕方、机にしまっておいた辞表を取り出し、課長に提出した。

サッポロビールに入社して四年目だった。

埼玉県にある川口工場の飲料課に所属し調合部門を担当していた。

リボンジュースやリボンシロンなどのソフトドリンクの原液を調合する現場を監督する仕事で、そのかたわら、新製品の開発にも携わっていた。当時はまだ、カナダドライ社から委託されたコーラやジンジャーエール、ルートビア、トニックウォーターなども製造していた。大部分が日本に駐在する米軍向けであった。

コーラもまだそれほど普及していなかった時代で、ルートビアに至っては、ビアと名はつくもののアルコール分は全くなし、サロンプラスの臭いがした。アメリカ人とは思議な飲み物を飲む国民だと思った。人種と風土が変われば食べ物もずいぶん変わるのだな、と痛感した。

四年前に大学を卒業して、すぐに現場を任された時には戸惑った。何しろほとんどの人が自分より年長で、現場の職長は父親よりも年が上だった。だが次第に気心が知れ仕事に慣れてくると、今度は毎日同じことの繰り返しだが苦痛になってきた。

学生時代は、休みになると、家庭教師のアルバイトで稼いだ金をやり繰りして日本国中を旅してま

わった。札幌に叔母がいたせいもあって、北海道にはよく行ったものだ。飛行機は学生にはまだ贅沢な時代だったから、夜汽車と連絡船を乗り継いで叔母の家にころがり込んだ。父の妹だが、「あんたのお父さんには、私もずいぶん世話になったから」と、文句も言わずに泊めてくれた。

北海道に憧れて、高校時代は一時、北大を受験しようとも思っただけだった。サッポロビールに入ったのも、北海道につながっていると考えたからであった。だが会社に入ってみると、北海道はおろか、出張さえもない。当時工場は土曜日も一日中動いていた。日曜だけではどこにも行けない。

僕にはどうも、一つ所にじっとしていられない放浪癖があるようだ。学生時代に旅をして回ったのも、この放浪癖のなせるわざだったのだ。会社に入って落ち着いてみると、体の中で放浪の虫が騒ぎ出した。そして、ともかくこの虫を一時的におさえようと考え出したのが、アメリカ旅行であった。

日本はもう回る所はない。あとは外国だが、幸いなことに六四年から海外旅行が自由にできるようになっていた。

一カ月の休暇願いを出したところ、初めは長すぎる、前例がないということで会社は許してくれなかった。有給休暇と休日を使えば、欠勤日数はそれほどでもなかったのだが。それで、「アメリカのソフトドリンク業界視察」という名目をつけ、ようやく許可を得ることができた。もちろん、費用は自己負担だったが、視察という名目上、会社が指定したボルティモアのソフトドリンク工場、ロサンゼルス（「サンキスト」、ハワイにある「ドール」）のパイナップル工場を回ることになった。これにニューヨークを加えてルートが決まった。

ニューヨークは絶対にはずせなかった。ここには松尾がいたからだ。

時期は、会社が一番暇な時ということで、六九年の一月ということになった。

初めてのアメリカ旅行

六九年一月十日、日航機で羽田を飛び立ち、サンフランシスコに向かった。日航はすでに六六年からニューヨーク線を運航していたので、初めてのアメリカ行きには心強かった。

ただサンフランシスコ到着の一時前ぐらいから、飛行機が大揺れに揺れた。後で知ったのだが、このあたりは気流が悪いので有名だとのことである。僕は、旅をしている割には乗り物に弱かったもので、この時もたまらず吐いてしまった。

この飛行機はニューヨーク行きだから、サンフランシスコに到着しても、そのまま座っていればよいのだろうと思っていたら、ここで入国審査を行うからと降ろされてしまった。預けた荷物をいったん引き取り、税関検査のあとに再び預けなおす。不便だが仕方がない。地面に足をつけたことで乗り物酔いは治まったが、どうしたわけか、荷物がなかなか出て来ない。ようやく最後になって出て来た荷物を持って税関検査をすませ、また預けなおして、飛行機に戻るのだが、広い空港なので、目あての飛行機を探すのにひと苦労、機内に入ったのは出発直前で、大汗をかいてしまった。

ニューヨークのJ・F・ケネディ空港には、松尾正義の懐かしい顔があった。夫妻で出迎えてくれたのだ。松尾夫人とは初対面であった。

「松本さん、本当に来たんですね」

松尾の声を聞いて、いままでの緊張感がすっと消えていった。

彼は、かつて川口工場で僕の部下として砂糖の調合を担当していた。高校時代、早実の野球部にいたというだけあって、立派な体格をしていて、重い砂糖袋を軽々と持ち上げていた。気性もさっぱりとした好青年だった。

ちょうど僕が入社して一年たった頃、現場を見回っていると、松尾が傍にやって来て、

「松本さん、私は会社を辞めてアメリカに行きます」

と言いつ出したので、びっくりした。

彼がかねがね英語を熱心に勉強していたことは知っていた。会社の行き帰りにも英語の本を手放さなかったのだ。

「本だけでは話せないと思って、休日にはボランティアで、アメリカ人に東京案内をやっていたんですよ。ところが今度、たまたまテキサスからやって来たアメリカ人が、どういうわけか私を気に入ってくれましてね、アメリカに來たいんならスポンサーになるとやると言ってくれたんですよ。私は高卒なので、このまま会社においても出世はたかが知れていますから。いっそのことアメリカに飛び出してみますよ」

とにっこり笑った顔がよかった。

アメリカに渡った松尾からは時々絵葉書が届いていたので、彼にだけ僕の到着時刻を知らせておいたのである。そのころはニューヨークの商社の現地雇いとして就職し、東京銀行に勤める夫人と結婚、もうすぐ子供が生まれるという状況だった。

彼の車で、マンハッタンの三四丁目にあるYMCAのホテルに送ってもらった。トイレは共同なの

だが、このトイレの個室にドアがないのには驚いた。便器に腰かけて外の人と話をするなんて、一番のカルチャーショックだったかもしれない。

松尾が会社を休んでニューヨークの街を案内してくれた。自由の女神、エンパイアステートビル、五番街、セントラルパーク……お決まりのコースだが、こうして松尾とニューヨークをまわるなんて、夢にも思っていなかったことだ。

「松本さん、これを食べてください。今度発売になった新製品で人気があるんですよ」

と、見物の途中で買って来た紙包みを差し出す。

たっぷりのひき肉とチーズ、それにレタス、タマネギ、トマト。両手に持ってかぶりつくと、肉汁にマヨネーズ、ケチャップ、マスタードが渾然として、実にうまい。マクドナルドが去年の暮から売り出した「ビッグマック」で、一個が四五セントだった。

ピザもうまかった。日本ではイタリアレ스토랑に行かなければ食べられない、いわば高級料理なのに、ここではどんな街角にもピザ屋があって、皆立ち食いをしている。トマトソースの味加減がよく、モッツアレラチーズがしこしこして味わいがある。オレンジジュースもよかった。なにしろ果汁一〇〇パーセントなので濃厚な香りと味がする。日本では果汁は一〇パーセント、これに香料やら添加剤を加えて本物に近い味を出そうと苦労している。アメリカでは果汁一〇〇パーセントでなくてはジュースと言っではいけないのだ。